1．ラテンアメリカ基礎知識の話

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

1.4 言語について

ラテンアメリカ地域の特徴の一つに言語的な多様性と特性がある。メキシコ以南、南極の手前までスペイン語が普及し、ブラジルはポルトガル語。その他、南米カリブ海岸側のガイアナ、スリナム、フランス領ガイアナ、カリブ諸国、アンティル諸島では英語、フランス語、オランダ語が公用語として使用されている。他のアジア、ヨーロッパと比べると、多様性といっても言語の上では驚くほど統一されている、というのが通説である。

ただ、歴史的に 15･16 世紀より、新大陸に到着したスペイン、ポルトガル、カリブ海にはその後、前述のオランダ、イギリス、フランスが入り、続いての奴隷制でアフリカ系の人が入植したり、アジア系の人たちが移民したり、そのような過程の影響が絡みあって、ラテンアメリカ地域の実社会に入ると言語的にはかなりの多様性が存在し､同じ言語でも各国によってかなり「温度差」（方言）が存在する。今回は、ラテンアメリカ地域のその少し異なる言語間の「温度」とは何かということに少し触れることにする。

＊クレオール言語

ベネズエラに近いカリブ海の旧オランダ領の島々、ABC 諸島 (Aruba, Bonaire, Curaçao の頭文字) では「パピアメント」という混成言語が話されている。パピアメントは「クレオール語」の一つとされている。「クレオール」とはスペイン語でクリオージョといい、スペイン人が 15 世紀末に新大陸に到着して以来、新大陸で生まれたスペイン人や白人のことを指すのが本来の意義である。そしてその言語とは、植民地時代、植民の言語と先住民の言葉が混ざり、つくられた言葉だそうである。

パピアメントの基幹となっている言語はポルトガル語であり、それに英語・スペイン語・オランダ語の要素が入っている。どんな言語か以前から実際にその地域に行って聞きたいと思っていた。その思いが叶い、2 年ほど前キュラソーに行く機会があった。思惑通りパピアメントが話されている。しかし、わかりそうでわからない。単語は聞こえてくるというか何かしら拾えるのだが、文章の意味は取れない。「これがパピアメントか～！」となぜか妙に感激した経験がある。

＊先住民語

新大陸「発見」以前、先住民は独自の諸文明を築き、独自の言語を使用していた。現在でもその数は全体で約 550 言語あり、コロンビアでは、60 言語、ペルーとメキシコで 50 言語、ボリビアで 30 言語、中米のパナマでさえ 8 言語が話されている。[(1)] その代表はケチュア語系、グアラニー語系、アイマラ語系、コロンビアではチブチャ語系が多い。パラグアイはラテンアメリカ諸国で二つの公用語の国である。スペイン語とグアラニー語系が使われている。

このような先住民語がスペイン語に混ざり、各国独特な言葉や慣用表現などが存在している。地名などに顕著に現れている。図は、ラテンアメリカ地域での先住民言語数を示している。

＊スペイン語化政策・スペイン語への統一

一方、20 数カ国の公用語であるスペイン語もラテンアメリカ社会では方言がかなりある。だがその方言や言語の多様性の裏腹に、スペイン語は統制された言語なのである。何故なら「Real Academia Española」スペイン王立アカデミーという組織が、文法事項、表記法などの基準を規定しており、学校教育における言語の統制を行っているからである。日本の文部科学省に所属する国語審議会のような国語政策組織で、この組織により、20 数カ国の公用語であるスペイン語が統制され、ラテンアメリカ諸国では、どこでも通じ、どこでも同じ表記の標準スペイン語が維持されているわけである。

図　Lenguas Indígenas en América Latina
（ラテンアメリカにおける先住民言語）
http://cronicasinmal.blogspot.com/2018/07/lenguas-indigenas-en-america-latina.html
「国ごとによる先住民言語の数 10, 50, 100」
「ユニセフによれば、ラテンアメリカにおける先住民言語 557 言語の約 5 分の 1 にあたる先住民語が絶滅の危機にさらされている」

このスペイン語化政策というのは、征服者が入植した時代からの政策である。前述の王立アカデミー会員であり、スペインの作家であるフェルナンド・ラッサロ氏は、征服者や聖職者が新大陸に到着して以来、ある困難に直面していたとし、その中で、「一つの地域の部族言語を習得しても、隣接する部族とのコミュニケーションには何の役にも立たなかった。先住民の中でスペイン語を仲介するものを養成するしかない。この事実は痛くコロンブスをがっかりさせた。(…) 当時の王室は、スペイン語教育には目もくれず、現地に重きを置き、当時の聖職者に先住民の言語を覚えるように指導した。しかしながら、征服作業や布教が困難である状況を踏まえ、先住民には自分達の言語の使用を禁止し、スペイン語を覚え使用する、という通知書がすでに 1595 年に作成されたのにもかかわらず、当時のスペイン国王フェリペ二世はその訓令には賛成せず署名しなかった。[(2)]」

このような「文化の支配」的目論見がなされていたわけである。同氏によれば、1796 年メキシコのフランシスコ・ロレンサーナ大司教がスペイン国王カルロス三世に宛てた、先住民言語が多く､「キリスト教布教」が難しいという内容の書簡により、国王は教師を選出しスペイン語教育に踏み切った。

皮肉にもそうしたスペイン語化政策は、後に「独立」の火種になるとは誰も予想しなかった。

［註］

（1）https://www.google.co.jp/search?client=opera&q=lenguas+indigenas+en+América+Latina&sourceid=opera&ie=UTF-8&oe=UTF-8

（2）Fernando Lazaro Carreter, *Curso de la Lengua Española*, Anaya, 1988